

国会での演説

(一九八三年十一月十一日)

今日は、アメリカ大統領として初めて、この席から日本の国會議員の皆さまにお話できることは大きな光栄であり、名誉であります。

日本に参りましてから、まだ一日ですが、妻ナンシーともども、くつろいだ気持にさせていただき、おもてなしの暖かさに感激しています。このご歓待はとりもなおさず、二億三千万余のアメリカ国民に寄せられたご厚意にはなりません。そこで、アメリカ国民から日本の皆さまへのメッセージをお伝えします。「私たちを結ぶ友好の絆は、私たちの間にある太平洋よりもずっと大きいのです。日米の友好は永遠です」と。

今から十一年前、やはり秋でしたが、私は初めて日本を訪れました。そして今日も、あの日と同じように、日本には活力と進取の気風と勤勉の精神が進歩を求める大きな潮の流れとなっているのを感じます。そして今日もまた、私は日本の皆さまの類まれな才能に深い感銘を受けています。皆さまは、過去の持つ優雅さや美しさを失わずに未来を築いておられるからです。

調和こそが日本文明の伝統の特質であり、それがいつもアメリカ人の心を引きつけてきました。調和を得るために、いろいろな違いを融合しながら、高い理想を求めることが必要です。私たちは、そうした理想の多くを共有しております。かつてのアメリカ大統領ユリシーズ・S・グラントは一八七九年にお国を訪れ、この国の魅力に打たれて「日本はこの上なく美しい」といつております。

グラントは明治天皇にお目にかかり、その席上で、当時、差し迫った問題であつた民主主義に話題が及ん

だのであります。グラント元大統領が述べたのは、政府が国民をほんとうに代表するようになれば、いつも政府はより安定し、國はより繁榮する、ということでした。

このたび私は、この一世紀來の伝統をさらに押し進める上でお役に立てるこことを誇りに思います。日本に到着すると、まず天皇陛下にお目にかかり、そして今、現憲法のもとでの第百回国会という、日本の歴史における大きな里程碑を皆さまとともに迎えています。これから六年後、日本は国会開設百年を迎え、アメリカも議会創設を記念することになります。ここに皆さまに対し、アメリカ合衆国議会の心からのご挨拶をお伝えします。

この議場に立つとき、私の心に浮かぶのは、日本の誇るべき国づくりと民主主義の歴史であり、自由な人びとの夢という希望に満ちた精神であります。両国が持っているすべての力、私たちを結んでいるすべての絆のなかで最も大きなものは、自由への献身であると私は信じています。日本とアメリカは、世界の自由諸国と自由経済のなかで、その先頭に立っています。

たしかに、両国の中には八千キロの距離があります。習慣、言語、伝統も、はつきりと異にしています。そして、しばしば世界市場での競争相手でもあります。しかし、この誇るべき日本の国会と、アメリカの議会によって代表される両国民は、それぞれの自由な社会を支える諸原則を守る情熱において、心は一つであります。

この原則とは、人間の生命の尊厳、家庭の大切さであり、眞実、寛容の精神、勤勉、協力、愛などについて、親や学校が教えるという責任です。そして、政府、産業界、労働界などに課せられた役割もあります。この役割は、自由な人びとがよりよい世界を築き、それを子々孫々に残すために必要としている機会と安全をつくり出すことです。

遠く離れた両国ですが、自由とは人間の尊厳と権利と平等を尊重するという信念で結ばれています。明治

の偉大な教育者、福沢諭吉は「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」といっています。

アメリカの偉大な指導者エイブラハム・リンカーンは、政治の観点から同じことをいっています。「同意を得ずには、他人を治められるほど完全な人はいない」と。日米両国民は、自らが選んだ政府を持つ権利を尊重し、また政府が国民に奉仕するよう期待しています。私たちは、国民が政府に奉仕するなどとは期待しません。

言語は違っていても、日米両国民は、自由というコトバを使って話し、祈り、働きます。私たちは、自分の意見を発表し、恐れることなく反対意見を述べ、神との語らいを通して心の平安を求める権利を守ります。私たちは、企業精神、貯蓄、冒險に報いるべきである、と信じています。そして、空のかなたの星に目標を定め、風と波について、進歩への新しい通商路を開こうとする人たちを勇気づけます。ところが、一部の国では、市民を監視し抑圧しています。自由こそ、すべての人を豊かにする多様性と創造性を育むものである、と私たちは信じています。私は芭蕉の「草いろいろ おののおの花の手柄かな」という句が好きです。

私たちの自由は、恐怖心を生むようなことはありません。なぜなら、自由は、いかなる脅威も与えないからです。私たちは、何ぴともをも脅かさないし、何ぴとの脅しにも決して屈しません。日本とアメリカは、国民を閉じ込めるために壁をつくつたりしません。私たちは、国民を黙らせるために巨大な秘密警察を持つ必要もありません。反体制分子を、いわゆる「精神病院」にぼうり込んだりすることもありません。そして、無防備の旅客機を冷酷無情にも撃墜するようなことは、決していたしません。あたら罪もない命が悲劇的に奪われたことを、皆さまとともに私たちも悲しんでおります。

日米両国とも、決して完全ではありません。しかし、この不完全で危険な世界で、アメリカと日本は、世界の人びとの切なる願望を体現しています。それは自由であること、平和のうちに暮らし、物質と精神の豊かさを生み出し、それに新しい息吹を与えていきたい、という願望です。私が日本を訪れたのは、両国は一

つの歴史的な機会、いや歴史的な責任を持つているからです。両国はお互い同士や太平洋地域だけでなく、全世界のために強力なパートナーになることができます。そこで私が問いたいのは、そのパートナーシップの要求に応え、それを実現する決意があるのか、ということです。私はたまらうことなく、答えます。「私たちにはその決意があり、実現するつもりである」と。

日米は、その歴史のなかで長い間、内側に目を向けていました。しかし、その時代は去りました。日米の経済力を合わせると、自由世界の生産高の半分を占めている現在、両国は世界的な責任を免れることはできません。日米の産業は、遠くから運ばれるエネルギーや鉱物資源に依存しています。日米が繁栄するには、健全な国際金融システムと自由で開放された貿易市場が必要です。そして、日米の安全保障は、友好国と近隣諸国の安全と切り離せません。

世界の平和と繁栄を望むだけでは十分ではありません。われわれ二つの大国は、他の国とも協力して、これまでの努力によって手に入れた価値と自由を維持しなければなりません。安全のないところに繁栄はなく、自由のないところに安全はありません。そして、日米が調和を保つて努力しなければ、これらの目標はどれも達成できません。私は、平和へのアメリカの切なる願いを携えてやって来ました。その願いはまた、中曾根総理をはじめ、すべての日本国民の願いであることを知っています。両国民は平和の民であり、人間の悲痛な苦しみを知っています。これまで、私は四つの戦争を体験しました。ですから単にアメリカの大統領としてではなく、夫として、父として、祖父としてお話をしたいと思います。現代において、かけがえのない私たちの文明を守る政策は、ただ一つしかないと私は信じます。それは、核戦争に勝利はありえず、核戦争は決して戦ってはならないというものです。

核兵器を保有することの唯一の価値は、それが絶対に使えないよう保証することにあります。私たちの夢

は、核兵器が地上からなくなる日が来ることだと申し上げる時、私は全世界の人びとの声を代表しているのです。

軍備管理は、軍備縮小を意味しなくてはなりません。アメリカは自らの役割を果たしています。二ヵ月ほど前、国連演説で私が誓ったように、アメリカは現在より低いレベルで軍事力を安定させるため、公正で検証可能な協定なら、どんなものでも受け入れます。私たちは有意義な削減を望み、妥協するつもりです。

戦略兵器削減交渉で、アメリカの代表は、これらの目標を達成するなんらかの方式をソ連側に引き続き要求しています。中距離核戦力に関する交渉でも、より射程距離の長いものをめぐつてアメリカは同じ方向を求めており、あるカテゴリに属する兵器全体を廃棄しようという提案さえしています。私は、日本国民の安全と安寧に悶える問題についての交渉に臨んでは、私たちの責任を強く自覚しています。ひとつはつきり申し上げましよう。より射程距離の長い中距離ミサイルの脅威を、ヨーロッパからアジアへ移しかえるような、いかなる取り決めも私たちは絶対に受け入れてはならないし、また受け入れるつもりもありません。

相手側が誠意を持つて交渉する意思がないことに、私たちは大きな挫折感を抱いています。私たちは核兵器の保有量を大幅に削減しようと望んだのであり、それは今も同じです。しかし、彼らは、世界が望む大幅な削減を妨げています。私たちは、誠意を持つて交渉を前進させるよう、新しい提案をしました。それは、同等のレベルまで実質的な削減をする、そのレベルは低いほどよい、というものです。しかし、それに対する最初の積極的な反応を、私たちは未だに待っています。

このような厳しい状況にもめげず、私は打開の道を探し求めます。アメリカが交渉のテーブルから立ち去ることは決してありません。平和は、あまりにも大切なものです。常識からいっても、私たちは、ねばり強くあらねばなりません。私たちは、ねばり強くやりぬくつもりです。

私たちは不確定な時代に生きています。自由があるところ必ず、自由にとつての試練があります。その試

練は、「神聖なる領空」を守ると称して、何の罪もない二百六十九名の人たちが殺された、あの日本海上空での悲劇のように仮借ないものであります。その試練はまた、先月のラングーンでの韓国要人に対するテロ行為や、ペイロードでの米仏国際監視軍に対するテロ行為のように現実味のあるものです。さらに、その試練は、交渉の席で敵対国が行なう妨害行為や、自由を愛する世界の人びとを脅かしている彼らの露骨な企てのようになります。

平和と自由に対するこれらの脅威は、すべての自由諸国間に、より密接な協力が大切なことを裏づけています。「一本の矢は折れても、三本束ねれば折れない」と日本の故事はいつています。日米とその同盟国が、力を通して平和に貢献しようとする決意が強ければ強いほど、一層安全な未来の建設に向かって、より大きく貢献することになります。日米相互協力及び安全保障条約は、両国の安全保障関係の基盤としての役割を果たし続けなければなりません。日本は、自由の防衛という負担を一人で担う必要はありません。アメリカは、日本のパートナーです。私たちは、その負担とともに担つもりです。

自由の防衛は共同の負担でなければなりません。私たちは、自由を守れるはずであり、それを失うことはできません。日本経済の奇跡は、才能豊かで固い決意をもつダイナミックな国民によつて成し遂げられた。その奇跡の恵みは、自由という安全な港のなかでのみ守れるのです。

佐藤元首相は、その著書『平和と自由を求めて』のなかで、「明治維新以来百年間、日本は世界のより発展した諸国に追いつき、やがて追い越そうとしてたえず努力してきた」と書いておられます。ここで私が、皆さまはただ追いついただけでなく、ある面では、すでに追い越したと申し上げても、今さら注意を引くこともないと思います。ここでも、日米のパートナーシップはきわめて重要です。今のお客さんは、教える立場にあります。人間の意気込みに信をおけない人たちに、「日本に来てみなさい」とすすめたい、と思います。間もなく経済の生産でソ連を追い越し、世界第二の経済大国になろうとしている国に来てみなさい。協力、

規律、向上心などの力強い精神を国民のなかに培つてゐるこの国のかから学ぶためにやつて来なさい。そしてまた、その経済の奇跡を実現するのに力あつた政府の政策から学びなさい。その政策は、中央政府の計画よりも、むしろ競争を刺激し、イニシアチブを奨励し、貯蓄に報い、危険を冒そうとする精神に報いています。

過去三年間、わが国は、この方向に向かつて大きく進んできました。私たちは、過去の誤りを正しつつあります。再び希望がよみがえつています。自信が回復し、アメリカの未来は再び明るくなっています。私たちは、重税、過剰な支出、記録的な高金利、高インフレ、低成長などの峠を越えたところです。アメリカは新しい産業復興の第一段階に入つており、ほかの国を引っ張つて世界的な景気回復に向かおうとしています。しかし、わが国の一端には、いぜんとして支出を抑制する必要から尻ごみする人びとがいます。財政赤字の削減の名のもとに、彼らは増税政策に逆戻りし、日本の教訓を無視しようとしているようです。日本の戦後史をみると、そこから二つの驚くべき結論が引き出されます。まず、主要工業国のかで、日本の税負担は終始、最低の水準を維持し、成長率と貯蓄率は、最高水準を保つてきました。日本の預金者は、利子所得の非常に大きな部分を課税免除されます。日本のいわゆる不労所得税率は低く、日本では投資家にとって証券に対する資本利得税はありません。さらに、勤労者の圧倒的過半数にとって、最高税率はアメリカなどの他の工業諸国よりも、著しく低くなっています。すべての人インセンティブを与えることこそ、希望と機会に満ちた輝かしい未来への力強い成長を遂げる秘訣です。そして増税ではなく、成長のための奨励策が、アメリカの政策です。アメリカの議員を日本に派遣し、日本の議員の皆さまには、しばらくの間、アメリカの議事堂に入つていただくほうが、日米友好のためになるのでは、と考えさせられことがあります。

パートナーシップは、相互信頼に根ざした両面交通でなければなりません。互いに相手から学びとり、互いに協力しようという意欲を、つねに持とうではありませんか。私たちには、そうすべき十分な理由があります。

ます。日米両国の経済を合わせると、世界の経済総生産の三五・パーセント近くになります。両国は、海を隔てた国としては、世界最大の貿易パートナーです。昨年、日本はアメリカの総輸出の約一〇パーセントを受け入れ、アメリカは、日本の総輸出の約二五パーセントを買っています。一九八三年には、日米の往復貿易は六百億ドルを超し、七年前の二倍以上になるでしょう。

今年五月、ウイリアムズバーグ・サミットにおいて、先進民主主義諸国の指導者は、保護主義を押し返すために協力することを誓いました。この目標への私のコミットメントは、経済原理と、昔ながらの常識と経験に基づいています。私は、かつて世界各国が、それぞれの市場を競争から保護しようとした時に、結局、何が起きたかを覚えている世代の一人です。それは、大恐慌という悪夢でした。当時の世界貿易は、六〇パーセント減少し、労働者や農民や製造業者などのあらゆる人びとが打撃を受けました。

あの過ちを決して繰り返さない英知を持とうではありませんか。私たちは、貿易相手国とともに一つの船に乗っているのです。一方の国が船底に穴を開けてしまつたのに、他方の国がもう一つ穴を開けてよいものでしようか。そうだ、それが強硬姿勢などという人もいますが、私にいわせれば、それでは全身ずぶ濡れになります。穴を開けるのではなく、ともに力を合わせて穴をふさぎ、自由市場と公正な貿易という名の船が、私たちを一層の経済成長と国際的な安定へと導いてくれるようにしたいのです。

私は、保護主義という即効薬には、かねてから強硬に反対してきました。つまり、ローカル・コンテンツの規則で国内の自動車メーカーに対し、国内の労働力と国産部品の使用率を高めさせるような、競争を抑える立法には反対です。それは、雇用を守らずに価格を押し上げてしまう、残酷なまやかしになるでしょう。それでは、アメリカが日本から買う量は少なくなり、また日本が私たちから買う量も少なくなつてしまい、そうなれば世界経済のパイも縮小し、報復と非難の応酬が高まるでしょう。

選挙で選ばれた政治家にとって、選挙区の関心と、より大きな国家の利益のバランスをとることは、容易

ではありません。しかし、それこそ私たちの仕事です。そして、自由貿易の実をあげて、アメリカ国民の関心事に取り組むためには、私たちは皆さまの力ぞえを必要としています。アメリカ人は、日本の市場がアメリカの市場ほど開放されていない、と考えています。アメリカの商品が日本市場に容易に参入することを、今なお難しくしている障壁をさらに低くするために、私たちは皆さまの支持を必要としています。貿易障壁を削減するため日本政府が最近とった一連の措置は、この方向を目指した積極的なものであります。私たちは、この前進が続き、加速されるよう強く希望します。一方、私としてもアメリカにおける保護主義的措置との戦いを支持することを誓います。

私たちが、それぞれ少しずつ歩み寄れば、すべてが多くを得ることができます。二つの偉大な、成熟した民主主義国としてお互いを信じ合い、両国の長い友好関係に立脚し、パートナーシップを発展させるという信念を持とうではありませんか。日米は世界経済のリーダーです。日米とその他の工業国は、貿易の市場を開放し、相互への投資を促進し、発展途上国を援助するという責任とともに、他国を侵略したり支配しようとする敵対国への軍事技術の流出を食い止めるという責任を共有しています。

世界第二の自由市場経済国である日本の通貨は、その経済力と政治的安定を反映すべきだと私たちは信じます。私たちは、日本の円が国際金融と国際経済においてより大きな役割を果たすよう期待します。私たちには、最近の円高傾向を歓迎します。そして私たちは、グローバルな問題における、ますます積極的な日本の役割を歓迎します。難民救済や諸国への経済援助における日本のリーダーシップは、世界の重要な地域において安定を高める上で、きわめて大切なものです。アメリカは、軍備削減提案についての日本の助言を高く評価しています。

私たちは、時おりいい合つても、本気で反目することはできません。本気で反目し合う相手は、自由ではなく画一化を、力強いイニシアチブではなく屈従を押しつけ、確実な前進ではなく、絶望の未来を押しつけ

ようと/orする人びとです。それはまた、強引に巨大な軍備を押し進めて、明日の個人の生活と進歩を犠牲にしている人びとです。

日本と近隣諸国は、急速な発展を求めるすべての国にとって、輝かしい模範となっています。太平洋地域は、現在、世界で最も活気ある経済成長を遂げています。皆さまは能力を最大限に発揮しておられます。国民のすべてがそうすれば、奇跡が起こります。カリフォルニアで私は、勤勉な日本人が私たちにもたらした多くの奇跡を見てきました。

一八六五年、長沢鼎という若い侍の留学生は、何が西洋を経済的に強め技術的に進歩させたかを学ぶため、日本を発ちました。それから十年後、彼はカリフォルニア州サンタ・ローザに、「ファウンテングローブ・ラウンド・バーン・アンド・ワイナリー」という小さなぶどう酒の工場を開き、やがてカリフォルニアのぶどう王として知られるようになりました。長沢鼎は、学ぶためにカリフォルニアに来て、そこに住みつき、私たちを豊かにしてくれました。侍から実業家になつたこの日本人は両国に、多くをもたらしました。

日米の交流は、年ごとに驚くべきテンポで増大しています。今日、日本から優秀な大学生や大学院生約一万三千人がアメリカで学んでいます。また日本について学ぼうと来日するアメリカ人の数も増えています。日产自動車、京セラ、ソニー、東芝などの会社は、アメリカで何千人もの人びとに雇用をもたらしました。カリフォルニア州は、日本で大成功を收めている新幹線に範をとった高速鉄道の建設を計画中です。一九八五年、筑波で開かれる科学・技術万博にアメリカも参加しますが、これも日米協力の一つの象徴となるでしょう。

私は、この新しい太平洋の潮流を歓迎します。この潮流を平和のうちにたえず流れさせ、両国間に人びと思想の交流を進め、疑惑と不信の壁を打ち破り、協力と樂觀主義の絆を強化しようではありませんか。両国民は、それぞれ異なつた過去から出発し、地球の反対側で生活していますが、不屈の精神、自由を愛

する心、進歩への情熱によつて結ばれました。私たちは、同じ山を反対側から登り始めた登山者です。努力を重ね、高く登れば登るほど、互いに、ますます近づいてきます。そして頂上に達した瞬間、両者は一つになります。

つい先月、アメリカの登山隊と二つの日本の登山隊、合わせて三つのパーティがエベレストを登り始めました。日本隊はネパール側から、アメリカ隊はチベット側から出発しました。非常な悪条件のなかで、二人の日本人が命を失いました。しかし、この悲劇が起ころる前に、勇敢な登山家たちは全員、頂上の真下で出会い、互いに握手をかわしました。それから全員が、頂上をきわめ、勝利の輝かしい瞬間を分かち合いました。

親愛なる日本の皆さま、登山家が世界の最高峰で力を合わせられたのですから、強力なパートナーである三億五千万の両国民のすべてが、協力して世界のために働けば、どんな高みにまで登れるかを想像してみてください。ともに力を合わせれば、日米にとつて不可能なことは何もありません。
ご清聴ありがとうございました。